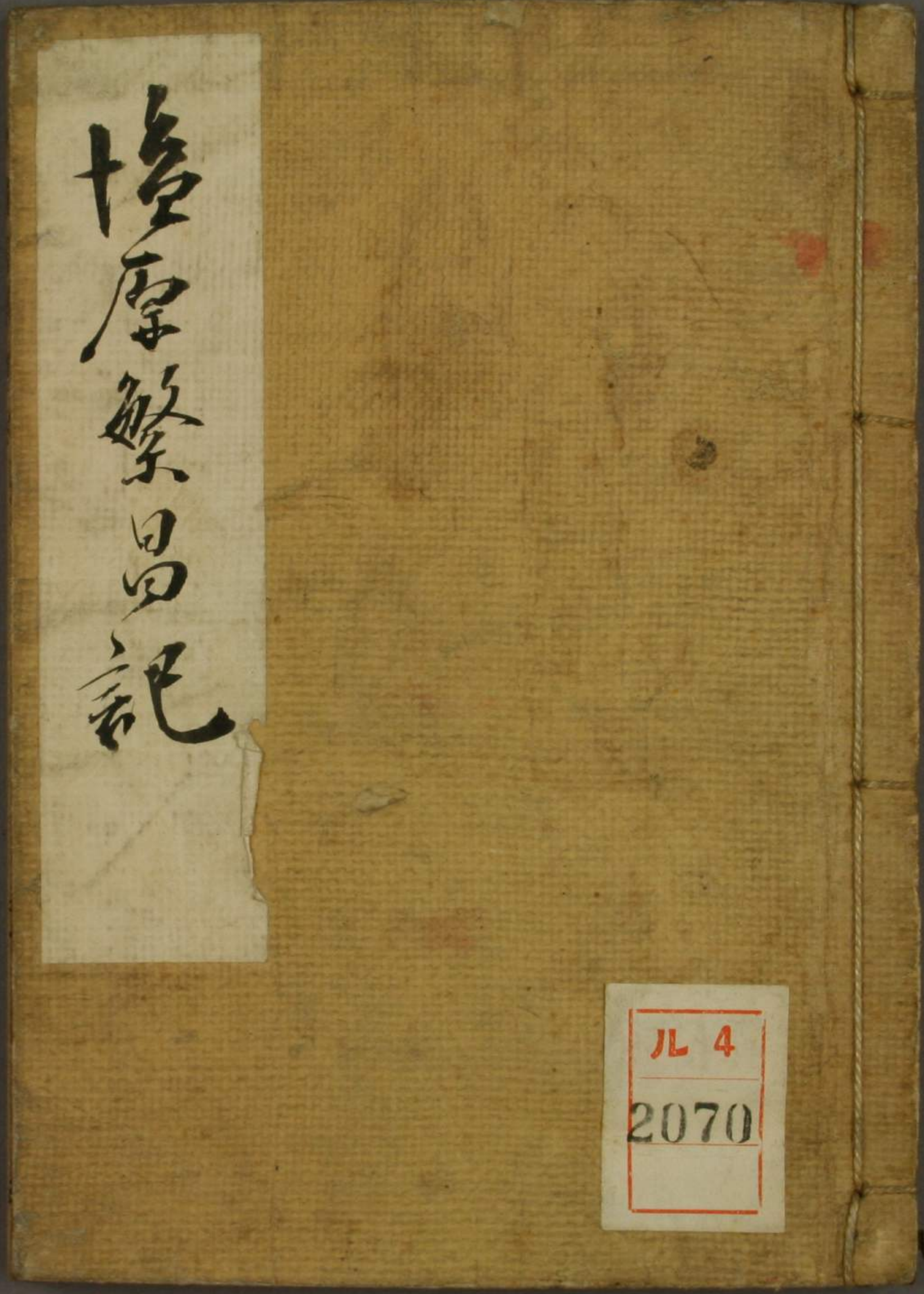


KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000

Kodak LICENSED PRODUCT

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18
Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18



垣原繁昌記

2070
4



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18
JAPAN TAMURA

門 ~~多~~
卷 ~~2221~~

門 儿 号 4
卷 2070

不

錦石秋編輯

鹽原繫昌記

君鳩氏藏梓

老

境

乙 丙 丁

今

塩原繁昌記

緒言

押々塩原の開闢ハ何年以前ニありテ何人の

創草ト云ふ事ハ慥ニらバト虽小事跡を以テ

考ル小凡そ千有餘年ハ至ルナラズ此

地ト云フヤ雲煙深ク鎖シ山重リ谷阻リテ元人を

通ゼ以神仙獨居を占テ幽邃殊小甚シ山中ハ

温泉あり鉄く病痾を治スルを以テ徑路漸く

大正 年 月 日 寄 氏 贈



塩原繁昌記

開け山間の人民各處に浴室を營て遊客を
 待し至ら然生ども岨道の險惡なる輿丁馬蹄
 の通過を所し非に故に偶々暑を避け病を
 養はんと欲せむ歩行の困難なるを恐れて
 猶豫せる者多しと聞く時をうな茲に明治
 十七年夏前栃木縣令三嶋君大小土工を起し
 懸岩を截開ま或は谷を埋め橋を架して一條
 の坦道立所し成る其工事の廣大なる竣工の

速なる人をして驚歎せしむ功成るの日より
 腕車疾く馳せ駕輿安らう小行を運輸の便元
 よう論を待ざるなり加之沿道到處風景の
 見べき物ありて更し瘦脚の勞るゝを知らん
 之に於てり夏秋の間生を養ひ勝を探るの人
 日小群を為て客樓充満せり夫蓬萊の仙境も
 道無まは行べあらん歐洲の文明も船無まは
 見らんと能はば海陸共し其便の貴重なる亦

言を待以予本年此地小遊比山中の繁昌を見
て自謂らく設令山川の勝温泉の功ある道
路洞通せざまハ何ぞ今日の繁昌を致さんや
因て聊々山中の景況を記して塩原繁昌記と
題し以て遊客午睡の一祭小供を

明治十八年初秋

編者誌

塩原繁昌記

磐城國

錦石秋編輯

塩原ハ塩谷郡の北端小ありて東西五里餘り
南北四里許り上中下及湯元塩原の四箇村小
分ち家數百三十餘戸連山東西小亘り箒川ハ
村の中央を流さ下塩原小至り鹿俣川を合せ
東流して中川小入る温泉の所在ハ下塩原の
部内大綱福渡戸塩竈塩湯畑下戸門前古町外

湯元塩原の八箇所なり此咽喉の處を関谷と云ふ塩原境大綱迄一里半許り道路平坦灣曲して山腰を旋る道小垂る懸崖の削りて建屏の如く岸小臨む盤石の疊にて防壘小似とり足下の谿水の岩石を穿ちて山岳を動かし頭上の峰巒ハ虚空小聳えて雲霧を起す沿道橋あまハ必瀧あり瀧あまハ必風致あり其數十を以て算ふ就中見返瀧と云へるあり瀧小

架たる橋も見返橋と唱ふ此瀧ハ深山叢樹の中より流を来り橋下を過て迷り飛車三十余丈實小壯觀と云ふべし之小次者を猿沢瀧となし高さ十丈餘り直流又屈曲水細しと虽も或ハ玉を垂るハ如く或ハ糸を懸る小似て風姿愛をべし都て此辺ハ瀑布の觀あるのこならん奇景幽勝所として有ざるなく思ハん歩を進めて大綱小至る



益

見返及大細之圖



○大綱 客樓一棟ありの之宏壯ならざるも
 新築の二階造りみて見困しあらに浴槽ハ
 二坪川の辺ありて二町余の急坂を降る
 所を望み御苦勞至極なり功能ハ癩疥瘡毒
 等小尤宜しと聞けり此上流ハ區々龍瀧と
 云へるあり恰も龍の卧とる如く覆流の
 懸泉ハ鱗魚の勢ハを止めらま岩下の淵ハ
 むま居て鯉を並べ鱒を翻ハを偶々龍門の

志あるハ鼻曲りの異名をとる故ハ俗呼て
 魚止瀧と云ふ近頃有志者相謀りて魚梯を
 設るの舉ありや小聞く若此舉成なバ浴場
 小魚肉餘りあらん又僅の川上小兒淵と云
 所あり大石兩岸より逼りて淵底計り知ら
 まに昔或僧一人の児を携へ入浴ハ来りて
 寵愛淺あらば翌年又二人の児を連れ来り後
 の児を愛むる事いと深りけまバ先なる

見我寵の衰へとるを恨之此淵へ身を投て
死しよると云ふ爰を遡まハ布瀧と呼つら
あり一條ハ直流して布を引ハ異ならハ是
又壯觀なり大綱より福渡戸迄行程七五六
町其間ハ洞門あり長さ十五六間穴の大き
四間許り之ハ八世ハ威真指骨ハ粟を生ハ
曾て聞く関谷より塩原迄馬道を開きとる
ハ安貞二年の事なりとあら指を折まハ

六百五十六年ハ及べり而來歳を積之月を
累收道筋を撰て開鑿修繕ハ力を盡せと
虽ハ三四里の間ハ嶺を越へ谷を涉り斜道
旋りて羊腸の如く其嶮惡譬ふるハ物なし
就中洞門の上ハ方りて左轍と云ハハ一
夫万人を支ふ所ハして危ぶむをありの
棧を渡し巔を望めハ眼眩ハ崖を覗ハ足
震ふ棧や命をこわらむと芭蕉翁ク

申上せし木曾の棧ももおまゝ勞らぬ難所
左の鞆ハ元來十六條の矢を挿み右の肩ハ
脊負ふ物なる昔或武將此所へ來掛りし
時岩石小鞆を支へらせて通るを得以因て
鞆を左の肩へ直し辛ふして通るける也
左鞆と唱へしとそ今塩原不遊ふ者ハ輿ハ
乗り車を走らせて斯る艱難を知らざむハ
聊ウ書して往時の傳を殘しぬ

○福渡戸 八口の畑中よ二の浴槽あり此處
小行在所新營の擧あるや小間及へり川の
向ふなる岩窟より湧出るハ岩の湯也手前
なるハ冷湯淡湯熱湯合せて四坪あり功能
の槩畧ハ卷末ハ掲げあるハ一覽の上ハ浴
ありまし當所ハ物品を商ふ家なく客棧の
こよて槓野屋坂口屋吉野屋玉屋松屋和泉
屋叶屋丸屋舟屋山形屋磯屋の十一戸なり

蓋原聚馬已

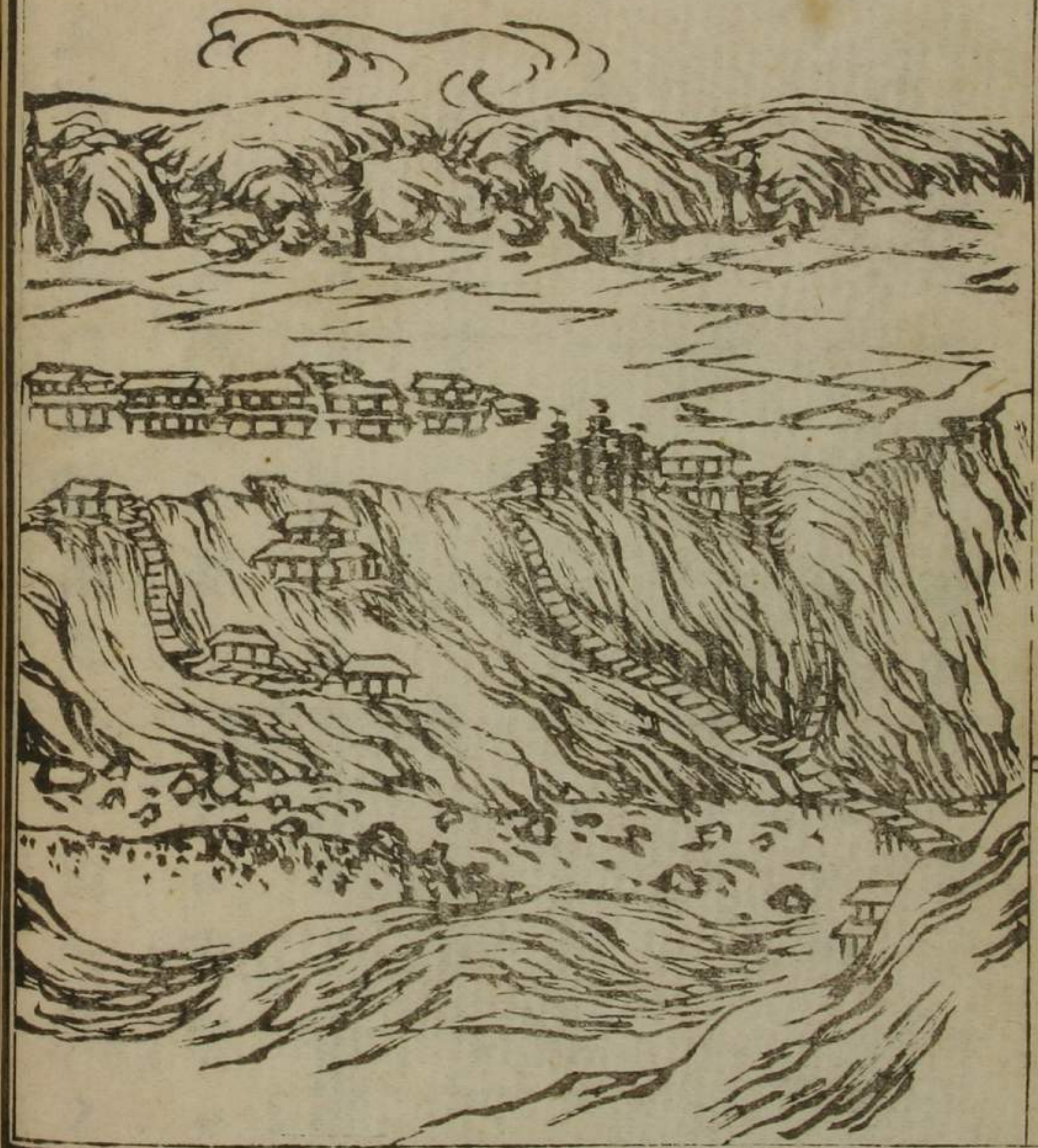
皆二階造りの樓を構つて各々浴客百有余
人を容るべし都て塩原山中の温泉ハ客室
毎小火爐を設け戸棚其外組板庖刀摺鉢等
小至る迄一切世帯道具を備へ置自ら炊く
者小の貸與へて用を便する事を依て米
味噌干魚の類を携へ来りて入浴するも右
り又ハ米塩を樓主より乞受け自ら炊くも
ありて誠小氣樂なる有様なり保し旅籠を

要する上等室小の世帯道具杯の設け無く
花櫃敷皮の類を用ひて随分鄭重の座席も
數あるやう也夏秋の間ハ山中到る所浴客
群集して樓々空室なく或ハ酒を呼者あり
或ハ餅を喰ふものあり思ひの快を盡し
て笑語の聲殊小喧びをし加る小手品手躍
の諸藝人を初め藝妓なとも入込て樓上樓
下湧り如く前代未聞の繁昌なり此上又



仙源

福波戶之圖



輿筋の錢道開けをハ猶一層の盛況を見る
 小至るべし此地三四年前迄ハ運輸の不便
 なる故小諸品の價意外高うし道
 路開鑿の功成りてより物價頗小低落して
 大小浴客の費用を減る小至ると誠小
 是山中の景氣を増のとならハ入浴の人
 容易く宿病を洗ふべし其一日の費用大抵
 左の如し但年々樓主等共議の上之を定む

一旅籠 七五錢以下拾貳錢迄

一中食 拾錢以下四錢迄

酒ハ旅籠の外を五と割より安く上酒壹合
 貳錢内外又自ら炊く者一日一人の八費

一宿料 四錢五厘

一蒲團壹枚貳錢 是ハ借りさきハ
 拂ふ及ハハ

一湯錢 五厘

一薪壹束 五厘 壹束よて一人分の
 飯汁を炊くふ足る

○塩竈 福渡戸より水道僅五六町を出て凡

右の山手小天狗岩と云へるあり高さ數百

仞亭亭として雲を凌ぎ獸も近付事能ハレ

鳥も翔ふ事能ハレ頂上小松樹枝を雜へて

實小天狗の巢窟と疑ハる又左の川中小

野立石と呼ぶ盤石あり高さ二丈餘り上ハ

平らクふして堅十二三間横八間許り松樹

蕭疎として趣殊小宜し昔蒲生飛禪守氏郷

此山中を通行の砌野立せし所と云ふ近頃

當村の某氏石上小茶亭を構へて客を待の

計較ありと思ふ小好ま納涼臺をるべし此

數十歩の上流小矢板某の屋敷地あり鬱樹

懸岸小臨之奇石中河よ横よハる若一亭を

設け石ハ清觀果て多あらん此地の温液ハ

坂下湯風呂湯熱湯の三槽をり熱湯ハ常小

沸騰して浴をべあらん家屋ハ七八軒あり

とろ客舎とてハ一戸も無く福渡戸塩湯等
小滞在の客来りて八浴をり小過ま以之を
方言小渡りと云ふ然まよ此辺ハ所々小
名勝多く徜徉緩歩をまハ神氣の爽なるを
覺ふ道の左小獨乙全權公使品川君の別荘
あり溪流小臨之青山小對して風致更小倫
無し又右なるハ君嶋氏の莊園をり庭中小
美人高尾の碑記建てり北山山本先生の撰

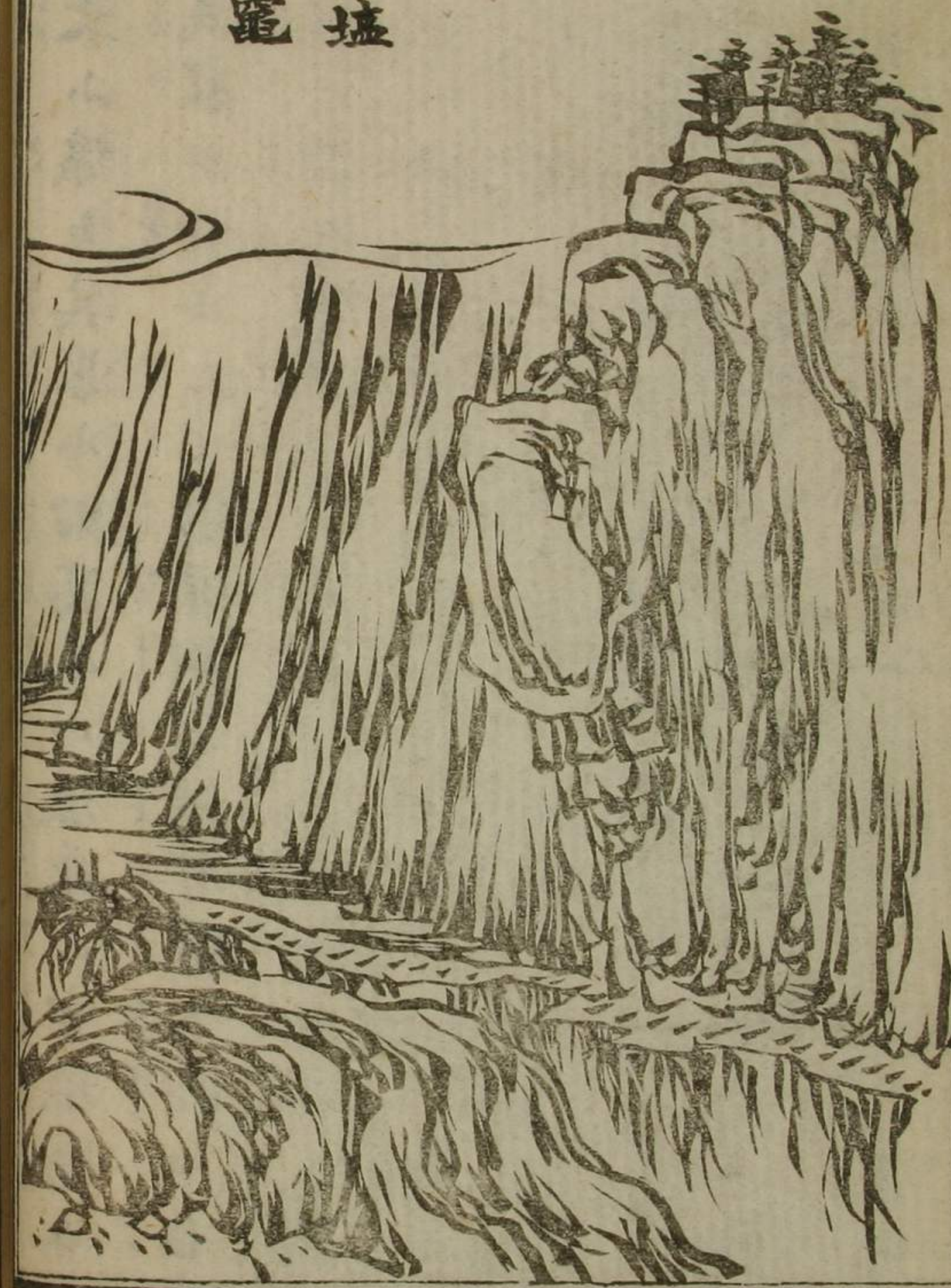
文小係り其畧小曰高尾ハ塩原山中塩竈の
民家の女おして吉原街三浦樓第三世の名
妓也容色諸藝共小前後小比なきを以て其
名一時小震動を當時公子富豪千金を擲ち
て一笑を買んと欲をり小容易小其期を得
る能ハざる也一旦東國の大守小贖ひ去ら
るゝも高尾敢て喜ふ色なく操を情人小守
望て大守の意小隨りハ以遂小三又水上小

塩原縣志

三

塩原繁昌記

塩原



三

摩子

志原

志原

志原

志原

志原



塩原繁昌記

三

害せらる云々此一事ハ小史ハ綴リ劇場ハ
演して普く人の知る處なり或ハ云ふ害ハ
遇ふの事後人の浮説ハ出テ必しも實を
らハ一説ハ高尾性質閑雅窈窕早く妓籍を
脱し黒髪を薙て佛ハ歸依し小庵を結比て
獨風月を樂む臨終の日紫雲室ハ入り諸佛
來り迎ふ日本堤の辺道哲庵境内ハ今高尾
の墓あり墓を環りて紅楓樹を植也蓋し其

名ハ象云々前後の二事何ぞ是なるを
知らんト云と雖も高尾出所の家今猶塩竈ハ
在て高尾の遺書を存在まハ此地の産なる
ことハ疑を容れ斯る山中より天下ハ名を
轟りしと絶世の美人を出せるハ亦奇と
云ふも餘りあり予思ハハ俳句を口走りて
「つり」とハ氣をそそぐ人多ク後ハ人あり
大笑して嗚呼物好なるや

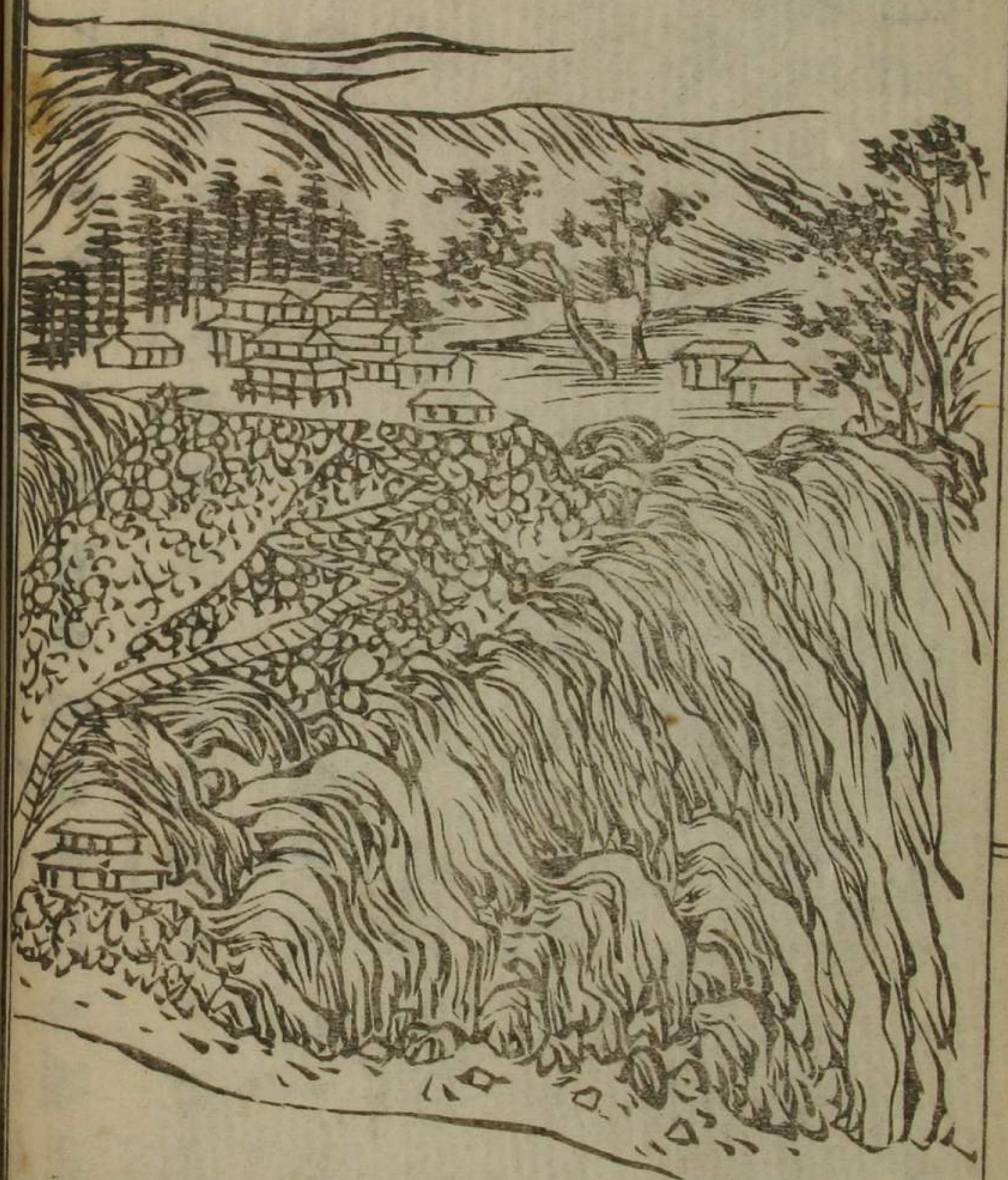
○塩湯 塩竈と塩湯の間ハ葦川を堺と在此
 川ハ架を橋を塩湧橋と云ふ明治十七年
 の新造ハ係る山中第一の長橋なり是より
 十町許り新道を切り温泉に至る浴槽ハ
 塩湯醫王湯相並びて二坪あり
 之を嘗めハ其味殊ハ鹹也古人の俳句ハ
 「山姫ハ紫の袴ハ梅つけん」と云へり
 あり哉凡て此山中温液ハ勿論土石ハ至る

連多少塩氣を含まざるハ左し塩谷郡或ハ
 塩原杯と云ハ是等より出とる称号ならん
 客棧ハ明賀屋玉屋柏屋の三戸なり中ハも
 明賀屋の構ハ八家屋十棟許り悉く懸岩を
 截開まよる所ハ建並び二層あり三層あり
 規模宏壮ハして浴客五百人を容へく樓ハ
 東ハ面し鹿俣川ハ樓下を流れて泉聲晝夜
 危石ハ咽ふ樓の四面ハ山を遠らし世塵

小遠く宛るら仙郷の思ひを為せり此地小
 遊ぶ者ハ只小温泉の久病を醫するあるの
 とならば風月長しなへ小樓小湍ちて生を
 養ふの料招りて来て入浴の人必此小
 来るの遅まを恨むるべし此後小方りて
 甘湯と云ふ所あり茅屋二戸山田を耕して
 僅小生計を營む湧湯一箇所ありとも微温
 小過て肌小適せば又此乾位小古城趾あり

城山と唱ふ今より四百年以前應仁の頃迄
 ハ明賀屋の祖先君嶋信濃守居城せりと上
 塩原鎮守の棟礼小も奉内野護現靈社一字
 大且那君嶋信濃守と記しとり此君嶋氏ハ
 宇都宮家の一旅よて三家の一と称せらる
 城の麓小温泉あり字を明賀と云ふ此處ハ
 君嶋氏の別荘なるとし此時小當りて海内
 兵乱相踵き宇都宮家も漸次小衰へて一族

塩湯之圖



塩湯
十月
中
あまのこころをよめや
あまのこころをよめや
あまのこころをよめや

仙居
印

離散をるふ至ふ之ふ於て君嶋氏に城を退
き土着して明賀の別荘に移り更ふ塩湯を
開きて客舎を業と為せり爾來連綿と業を
營い來りしに寛文十年大雨の節俄に後の
山崩れ家屋蔵庫を合せて土中埋めらる
止を得以旧地を棄て塩湯を増築して一家
之ふ引移り旧に依て客舎を營業とを故に
明賀を以て屋号と為と云ふ

○

畑下戸

畑下戸の塩竈と門前の間ふ在て

本道より僅の降り也浴槽ハ本湯中湯鳩湯

浴湯の四坪あり功熊の大畧此外ハ一箇所

浴湯と稱する物あり巻末ふあり何ふ因て名附け

るるを知られ俗説ふ昔一頭の貉あり断岩

を踏をつして谷底に陥り腰脚を傷めしふ

夜々此温泉ふ浴して治せしむる浴湯の名

ありと云へり家敷ハ十一戸ありと客舎ハ

大和屋伊勢屋佐野屋井桁屋紙屋の五戸也
家屋の構へハ福渡戸ふ及ハざきとち皆二
階造りふして相應ふ出来とる普請も見ゆ
地形ハ一層低く後ふ丘を負ひ前ふ川流を
抱く川の北岸ハ灣形の河原よて其中ふ廣
大なる土工あり東西五六十間南北六八九
間方形ふ高く石垣を築揚とる是板木縣令
樺山君が別荘の敷地なりと云ふ此地内の

西寄ふ泉池あり其水ハ溪流南より石垣の
底を貫きて池に注ぎ更ふ貫きて北に流る
又泉池の傍ふ温液あり元河原湯と称をる
もの是なり是より右手ふ方り南の出崎ふ
新しく見ゆる二層樓ハ宮内大輔吉井君の
別業なり川を隔てハ南崖ふ懸きる瀑布を
吉井龍と云ふ蓋し大輔の別業又因て名附
とるならん此瀧ハ屈曲とる岩面を奔流を

塩原繁昌記

三

事十八九丈流々斜々奇中み幽趣を具へ
て清觀雅人の腸を腦毛嗚呼大輔の別業や
臥してハ泉石小枕し坐してハ瀑布を望こ
夏ハ湍川の清風小三伏の熱を消し秋ハ前
山の紅葉小三秋の愁を忘る不老長生の術
座をあらふして得と何を必しも仙道を
學ハん又此部内須卷と云へふ所ハ温泉場
あり徑路を登る事八町許り湯守ハ根本氏

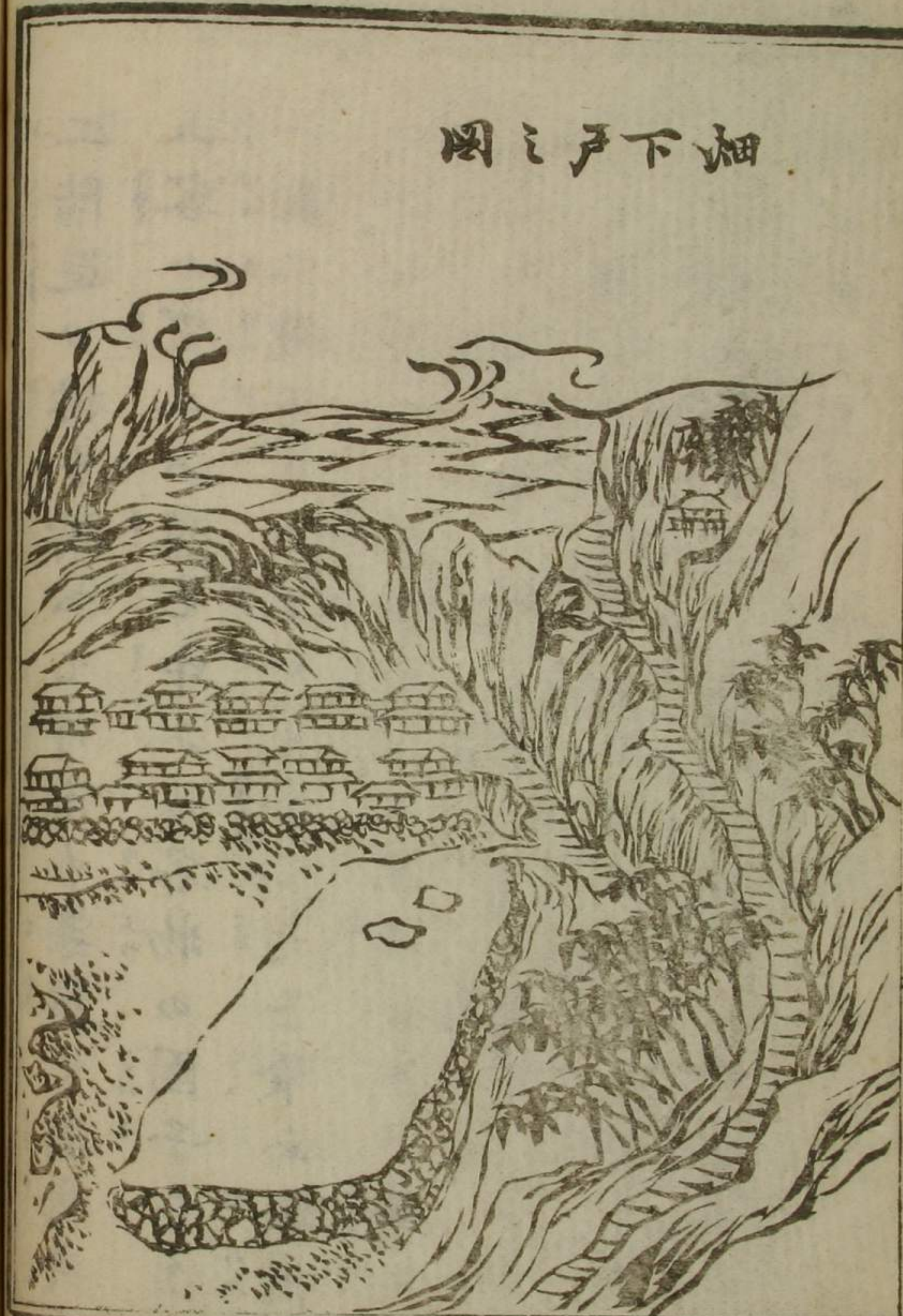
二階造の樓を構へて可なり手廣く酒食共
小客の望こ小應在中ふ名物の團子あり
一盆二錢下戸小上戸小争て之を喰ふ浴槽
ハ樓小接して二坪同質の温液なり一坪小
六筋の瀧を懸く故小瀧の湯と稱を之小浴
して腰を叩らせ頭を打せて上症を引さげ
更小樓小登りて一酌し醉小乘して午枕を
呼ふなと真小人間の小極樂

蓋源集

三



湖下戸之圖



○門前 畑下戸の西小方り塩竈より本道七
 八町小過に八口の道端小二槽の温液あり
 自樂房湯と称を次て下湯河原湯合せて四
 坪なり功熊の大畧家數十戸半ハ物品を
 商ふ客樓ハ和泉屋福田屋壘屋松本屋関東
 屋山口屋の六戸小て戸長役場あり郵便局
 あり此山中小て都合よま處なるべし道の
 北側小前の栃木縣令三嶋君り別荘の敷地

あり數十間の間方形小石垣を築き更小西
 北の隅ハ一段高く同様の石垣を築きとり
 嗟呼昨日追馬足も立ざる山中ハ貴顯方の
 追々別業を構へ莊園を設りハ道路開鑿の
 功ハあらばして何をヤ此辺ハ山あまど小
 簷ハ逼らば川あまど小壘を流さば川を隔
 つる山田ハ段々小壘之嬉拾の月を移して
 風景云がありなし又部内ハ妙雲寺と云ふ

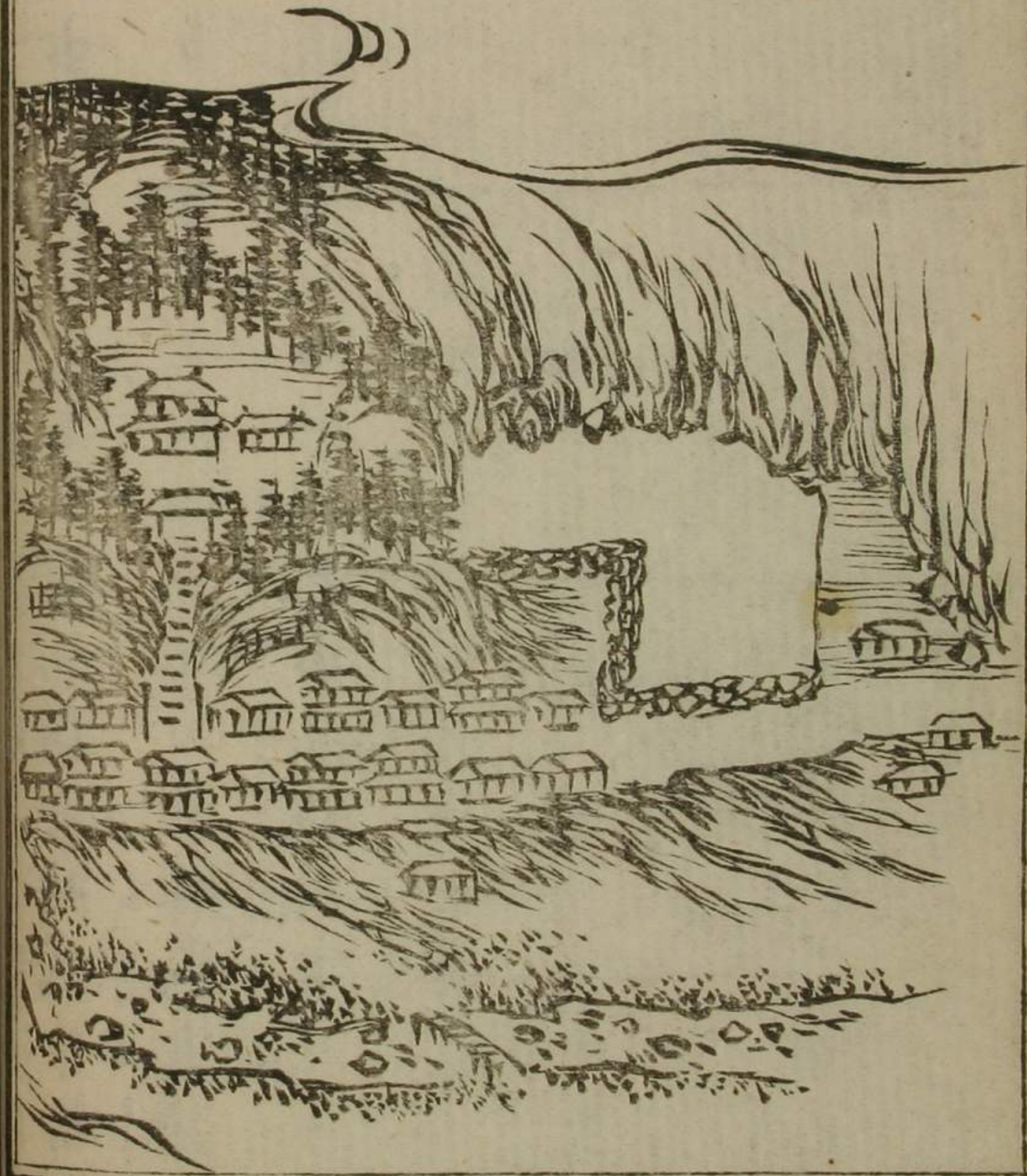
寺あり甘露山と号を中興開山ハ佛國禪師
の上是大同和尚なり其縁起の畧曰ふ此
寺ハ小松内府平重盛卿の姨母妙雲尼公の
開基なり釋尊ハ西天竺毘首羯摩天ヲ梅檀
香木を以て刻む靈像ふして内府の常ニ歸
仰をば處則本朝三釋迦の隨一也其濫觴を
原ぬる小壽永の昔平家一の谷ハ敗北して
氏族盡く流離を時ハ源頼朝公威を海内ハ

振ハ平氏の遺族を索めて漏さレ之ハ至て
邦畿千里身を匿を小地なし然るハ平家の
士筑後守貞能ハ道素宇都宮朝綱と姻婭の
親ニあり故小妙雲尼公を誘ひて下野ハ
下る此像ハ内府の遺愛を以て棄去ス
忍びに笈中ハ納めて自ら負ひ來り朝綱ハ
依て身を遁るハの道を謀り朝綱鎌倉の聽
事を懼まて肯て留めハ莫ハ藤原の山中ハ

送^まりて跡^{あと}を晦^くまし影^{かげ}を隠^{かく}す貞^{まこと}能^よ自^{みづか}謂^からく
 山^{やま}淺^あくして又^{また}近^{ちか}し宜^{よろ}く幽^{ゆう}谷^{やう}小^こ移^{うつ}るべしと
 遂^{つひ}小^こ塩^{しほ}原^{はら}の山^{やま}中^{なか}小^こ分^{わけ}入^いり草^{くさ}庵^{あん}を結^{むす}びて此^{こゝ}
 靈^{れい}像^{ざう}を安^{やす}じ信^{しん}心^{しん}を晨^{しん}花^かの紅^{くわん}小^こ染^そめ戒^{かい}光^{くわう}を
 夜^や燈^{とう}の輝^{くわい}小^こ照^{てう}をこ^こと幾^{いく}歳^{さい}月^{げつ}なるを知^しらる
 妙^{めう}雲^{うん}尼^に逝^{せい}をる小^こ逮^{たひ}び其^{その}法^{ほふ}名^なを寺^{てら}小^こ題^{だい}して
 妙^{めう}雲^{うん}と号^{ごう}を云^い々^く寺^{てら}の西^{さい}北^{ほく}隅^{ぐう}なる瀧^{たき}の傍^{わらわ}小^こ
 今^{いま}禪^{ぜん}尼^にの墓^{かぶ}あり笠^{かさ}石^{いし}ハ九^く級^{きゅう}塔^{たつ}石^{いし}小^こ文^{もん}字^じを

刻^くせバ古^こ色^{しき}宛^{えん}然^{ぜん}として實^{じつ}小^こ鎌^{かま}倉^{くら}時^じ代^{だい}の物^{もの}
 と思^{おも}はる又^{また}寺^{てら}中^{なか}小^こ永^{えい}祿^{りく}五^ご年^{ねん}の華^か鯨^{くわん}勸^{くわん}進^{しん}薄^{はく}
 を蔵^{ざう}に殘^{ざん}夢^む禪^{ぜん}師^しの筆^{ひつ}跡^{せき}也^{なり}書^{しよ}法^{ほふ}絶^{ぜつ}妙^{めう}唐^{たう}代^{だい}の
 調^{てう}あり一^{いつ}説^{せつ}小^こ義^ぎ經^{きやう}の臣^{しん}常^{じやう}陸^{りく}坊^{ぼう}と云^い者^{もの}義^ぎ經^{きやう}
 蝦^え夷^いへ渡^と海^{かい}の後^{のち}所^{しよ}々^々を遍^{へん}歴^{れき}して遂^{つひ}よ入^い禪^{ぜん}
 し後^{のち}又^{また}仙^{せん}術^{じゆつ}を得^えて千^{せん}歳^{さい}の壽^{じゆ}を保^{たも}ち一^{いつ}たび
 雲^{うん}巖^{がん}寺^{てら}小^こ住^{ぢゆう}して殘^{ざん}夢^むと号^{ごう}を予^よ今^{いま}是^ぜ非^ひを
 論^{ろん}せバ茶^{ちや}話^わ小^こ聞^{もん}康^{かう}を筆^{ひつ}をるのこ

門前
古町
市街
之圖



益原

○古町 門前と古町の間に僅に一橋を隔つ
 るのこふて宛らら一部内小異なら此橋
 上より眺むまハ川の南岸小數條の温泉瀑
 懸りて奇觀限りなり瀑布の此方小不動湯
 あり内小不動の石像を安んず湯ハ熱小過て
 浴をり小堪れ又橋の袂小瀧湯あり温瀑を
 引来るをもて此名あるもや次て中湯角湯
 御所湯合せて五坪あり功能の大畧あり御所湯

元鹿湯と称を昔此辺ハ芦茅茂りて所々小
 温液湧出を或時渡辺某芦の中小鹿の潜こ
 居るを見付之を打んと銃炮を携ひ来り
 し小鹿其機を察し逃出世しりと某山麓に
 逐至りて打止より之を撿る小此鹿前方
 より足小疵を受てありしと因て考ふる小
 獸類も温泉の功あるを知りて浴しよる者
 と見ゆ疵持足の速う小走る事能ハばして

打まよるこを憐きたり今温泉社内なる十
 二俣の大角ハ此鹿なりと云ふ故小浴槽を
 開きて後小鹿湯と唱へしを喜連川御所の
 入浴ありてより御所湯と改めしと云ふ此
 町ハ家數七六戸兩側小物品を商ふ店蒼を
 連ねて住居内容樓ハ角屋若荷屋中會津屋
 永樂屋鈍子屋會津屋稻屋那須屋米屋萬屋
 常陸屋の十一戸也皆相應なる家屋を構へ

二層あり三層あり中ハ内湯杯を設けて
 目立普請も多あり此處ハ塩原山中人家
 稠密の場所にて門前より續ま恰も宿驛の
 趣を為せり是より會津若松迄行程七余里
 新道開鑿以來運輸の便殊小宜しくさし小
 嶮しき山王峠小車を下らばして往復を
 小至り故小入湯小来る客の之ならん往還
 の旅人小温泉小浴して足を止め馬又駄し

天秤を肩ふたる商人も利潤の餘りあるは
湯ふ入り一合の徳利を傾けて数日の勞を
慰む此處ふ溪山の勝を談むる雅客あるは
彼處ふ賣買の利を説く商賈あり或は紅粉
を携ひとる富人あり或は温液を譽る患者
あり雅俗惠樂樓ふ満て其繁昌云ん方なし
此山中昨日の寂寥ふ引換へ無比の盛況を
見るふ至るは六千歳の一遇と云ふはし

○中塩原 中塩原は古町より續く本道なり

中上の兩村ふハ温泉の所在無く民家も山
腹山趾ふ散在し農業を務め獸獵を為て生
計を營めり入口なる川の北岸ふ孤山あり
峰頭ふ松樹鬱々として翠を重衣とり古ハ
塩原八郎家忠と云者居館せり趾なりと
左の森ハ八幡宮の社内なり建久の昔伊豆
冠者有綱う勸請をり所なる後嘉吉元年

君嶋信濃守再興して弓矢の神と仰く今猶
塩原山中の惣鎮守として諸人崇敬せり社
内小大杉樹並びて二本あり一本ハ周回四
丈小近く一本ハ三丈許り幹高五らざるも
枝葉地ハ垂て稀有の大木なり之を以て人
皆逆杉と称す是より東小方りて洞窟あり
深さ二丈餘り其底より脇へ入る事二三十
間通りて北崖ハ遠く万治初年迄ハ八幡社

内の方へも一條の洞穴通りてありしり同
二年の大地震ハ岩石崩れて塞りしと云ふ
土人等昔源三位頼政此岩窟へ隠れしと云
源三窟と唱ふるなと云へり又八幡社前の
川向ふ小方を幕岩坪と称す此地の絶壁
ハ削り如く横小引とる筋あるを以て幕
岩の名を負ハせり是より本道を旋り行ハ
道の傍ハ有綱の社あり有綱ハ三位頼政の

嫡男伊豆守源仲綱の子ふして伊豆冠者と
号を源義経の婚となりて武功ある事人の
知る所なり義経奥州下向の砌跡を慕ふて
来りしう道既ふ塞りて通るを得此山中
ふ匿きて時の至るを待つ此事早く鎌倉へ
聞之ぬむに取敢て相手の兵を向らししう
とも嶮岨ふ支へらむ戦利あらばして歸る
山中ふ今戦茅戰場杯と唱ふる所あり其

頃の古戰場なりふや有綱終ふ志を得に
當村の字小田市と云所ふ共て病死を後
天文七年神ふ祀り有綱神社と号せりとを
却説源三窟の説を聞くふ三位入道宇治川
敗戦の時自殺と偽り関東へ落て此岩窟ふ
潜るに匿ま再び兵を擧るの志ありと按ふふ
入道歳既ふ七旬ふ餘生り何ぞ宇治ふ死に
して汚名を残さるや又入道の三男宇治を

源義経傳記

遁きて此山小隠せし故源三窟の名ありと
是亦取ふ足らば三男ハ帶刀先生義堅の嫡
男ふして義仲の兄也義堅の死後頼政養て
子とを父子共ふ宇沼ふて自盡しよる事ハ
歴史よも載て疑ふべまあらば之ハ全く
孫の有綱う此地小終りよるを以て附會し
とるカのならぬう是より八九町行ハ小流
を隔て中上塩原の堺標を建とり

○上塩原と一カ八塩原 旧會津街道の要路小

當り後ハ尾頭峠小通じ前ハ黒嶽の碧翠を
掬し塩原極西の地小して一路萬木の中小
隠現し寸人尺馬崎嶇の間小出没を村人又
一奇翁あり細井又三と号を歳既ふ七十小
近けまとも高履を穿ちて杖つうに細字を
讀み眼鏡を用ひ其瞿鑠なる壯士を欺く
且強記ふして一度耳底小卸をハ終身

忘るゝ事なし翁幼より多聞を好む偶々沼
乱興廢の談ふ及ぶハ翁耳を清し沈黙して
談の終るふあらざまハ敢て去らばと予山
中ふ留る事數日翁と往來して閑話期無く
月落雞曉を告るハ談更ふ止に故ふ此書を
編むるふ當り翁の力預りて餘りありと
此辺ふハ尋友ハま名跡ハ有ぞ坐ハ是あり
新湯の景況を探るべし

○新湯 湯元塩原の部内なり此處ハ塩原山

中ふてハ人煙隔絶の地ふして別ハ一畫を
為る方位ハ門前古町辺より西南の山上ふ
方りて三條の通路あり一ハ塩湯より一ハ
古町より行程一里七八九町何せハ九々折
なる山道ふして芦荻の類徑路を埋め辛く
馬足の通ぢるの之路の傍ハ大沼小沼とて
二の池沼あり小沼ハ蒹葭生茂りて水色を

見^ミに大沼^{オホヌマ}ハ常^{ツネ}水^{ミヅ}湛^シつて豎^{タテ}五六町^{ウチヨロシ}横^{ヨコ}二町^{ニチヨロシ}
 許^{アツ}り鮒鰻^{フナウナギ}の類^{ルイ}を産^ウまると云^イふ山上^{カミノウエ}魚類^{イサノルイ}を産^ウま
 るるも六一^{いち}奇^キ一^{いち}ハ上^{カミ}塩原^{シホハラ}より是^{コレ}も一里^{いち}半^{はん}
 余^ヨの山道^{ヤマヂョウ}を走^マ上前^{ウマエ}の二道^{ニヂョウ}ふ比^ヒを望^{ノゾ}み登^{ノボ}り
 易^{ヤシ}きを覺^{オモ}ふ且^{かつ}道幅^{ミチノハ}も稍^{やや}廣^{ひろ}くして荆棘^{ケシキ}道を
 塞^{ふさ}ぐ等^{らう}の事^{こと}あるを此^{こゝ}道^{みち}と前^{まへ}の二道^{ニヂョウ}を以^{もつ}
 て新湯^{アたら}の首尾^{ウラビ}を串^{つら}く浴槽^{ヨウゾウ}ハ上湯^{ウノノ}中湯^{ナカノ}寺湯^{テラノ}
 猪湯^{イノ}の四坪^{よつ}硫煙^{リウエン}の氣^き山霧^{ヤマキリ}ふ和^{なご}して人^{ひと}の鼻^び

孔^{くわ}を穿^うつ故^{ゆゑ}小主治^{コナホトシ}中癬疥^{ナカシヤ}を尤^{もつと}と此^{こゝ}上湯^{ウノノ}
 中湯^{ナカノ}の二槽^{ニゾウ}ハ他^たの湧湯^{ユウゾウ}と異^{こと}なり後^{うしろ}の方^{ほう}ハ
 一面^{いちめん}硫黃^{リウワウ}山^{ヤマ}ふて處^{ところ}々^々より硫煙^{リウエン}を吹^ふ出^でて其^{その}
 洞穴^{どうけつ}へ水^{みづ}を注^そぎ入^いれ硫黃^{リウワウ}の火氣^{ヒノキ}よて水^{みづ}を
 沸騰^{ふつとん}せしめ更^{さら}小樋^{コナヒ}を通^{とほ}して浴槽^{ヨウゾウ}へ引^ひ入^いる
 仕掛^{しかけ}をせし恰^{あた}も人工^{じんこう}温泉^{オンセン}のやうに思^{おも}はる
 都^{みやこ}て温泉^{オンセン}ハ土中^{つちなか}火石^{ヒシ}ありて水^{みづ}を温^あめ其^{その}
 水^{みづ}又^{また}土中^{つちなか}小舎^{コナ}とある種^{しゅ}々の鑛物^{クワンブツ}を吸^あ入^いし

始て藥泉と成物をせし其吸入をる鑛物の種類も因りて病も適不當のあるものなり併し目のあより見へさせし人々其原因を知らざまども硫黄穴へ水を注ぎて其水を温むるも理合ふ於ては敢て異なる事なし客棧の藤屋下藤屋鶴屋蔦屋君嶋屋大黒屋龜屋菊屋の八戸相接して簷を連ぬ此八戸ふて湯元塩原の一村を為と云ふ家の構へ

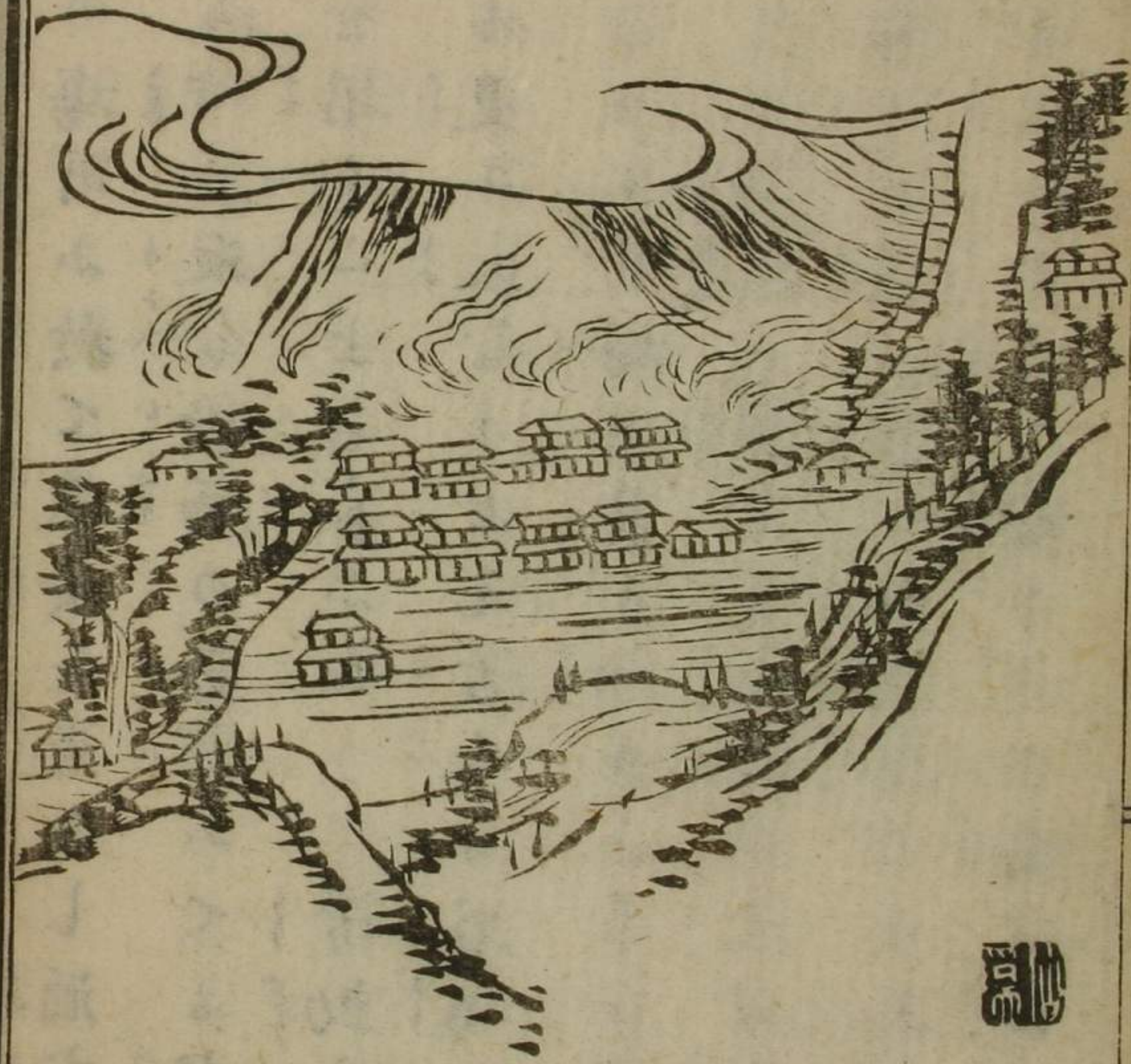
の福渡戸辺と同く皆二階造りふて可なり手廣く山間ふの珍らしき普請なり予中上塩原の兩村を經此ふ來りて以ひらく中上塩原の村内も廣く戸數も多けと矮少の茅屋のこふて一の見へるべき物有ざまども湯元塩原の僅々八戸の小村よて此家屋を構へ得るの單ふ温泉の洪益多る故ならん天道何ぞ人ふ幸福を與ふるの偏倚なりや

然まども此村ハ別ハ耕まづき田畑とてハ
 無く夏秋の間ハ浴客を遇し冬より春ハ至
 り追獸獵を業として生計を營むと云へり
 但大根ハ此地の名産なり地形ハ至て狭く
 東南ハ山を負ひ西北ハ稍開け閑雅幽静の
 地にして實ハ三伏の暑を避け採薪の病を
 醫むるハ無比の浴場と云べきなり夫温
 泉の病ハ利ある固より言を待ばと雖も人

家稠密の場所ハ於て飲食を恣にし酒肉を
 叨ふまゝ時ハ縱令無病の身體ハてハ病を
 醸し災を招くこと自家ハありて労働はる
 時よりハ更ハ大なりと云古人ハ浴場ハ物
 不自由なりこそ好けずと云まよるまよるハ
 病ハよりて温液を撰ふハ大切なまど主と
 して其場所を撰ふ事こそ肝要なま此地の
 如まハ古人の金言ハ背うざる處と云んり



新湯之真景



曾て聞く是より七八九町距て西北の方ふ
 元湯と云ふ所あり矢張湯元塩原の部内ふ
 属を此處ハ塩原山中ふても最初ふ温泉の
 開けよる所ふして昔ハ家數八十餘戸浴槽
 七坪ありしり万治二年の大地震ふ遭遇し
 家屋潰れ温泉涸て居住成難く各々一家を
 纏め門前古町或ハ畑下戸塩竈等へ引移り
 只八戸のこ残りて今の浴室を開きし故ふ

新湯と唱へけりとは當所の温泉社ハ則元
 湯より移しよる者ふて神跡ハ正觀音なり
 其厨子の中ふ安元元年の銘あり今を距る
 こと殆ど七百年ふ及びり以て此地開闢の
 遠きを證をべし是ふて荒々書終りよきと
 一二の名瀑あまハ序ふ筆を染ぬ塩湯より
 鹿俣川を六四五町遡るハ飛泉並ハ懸るを
 一番龍と称を左ふある者ハ雄奔猛飛勢ハ

同	同	下畑	同	湯塩	竈塩
鳩湯	中湯	本湯	醫王湯	塩湯	坂下湯
● ちゆうぶらう ● おし ● 志やく ● 里うめん ● せんま ● すばく ● うつけ ● やけど	● のがせ ● づつろ ● めまへ ● けんひま	● せんま ● づまろ ● ちあよ ● ーやうあち ● じうん	● おいびやう ● じうどん ● 里うめん ● トまつ	● ふくつろ ● 志やく ● あつけ ● うちこ ● むし ● せんま ● すばく ● あおやく ● あつけ	● せんま ● ちゆうぶらう ● 里うめん ● 里んびやう ● むし ● あつけ

同	同	同	前門	須巻	同
古町	同	同	鼻房湯	瀧湯	猪湯
不動湯	河原湯	下湯	鼻房湯	瀧湯	猪湯
● かんびやう ● ちのこち ● まうどく ● らうがい	● せんま ● すばく ● 里うめん ● つうぶらう ● トまつ ● あつけ	● のがせ ● けんひま ● づつろ ● めまへ	● まうどく ● やけど	● のがせ ● づつろ ● めまへ ● けんひま ● おねのつろへ	● ちゆうぶらう ● おし ● 志やく ● 里うめん ● せんま ● すばく ● うつけ ● やけど

同 龍湯

●のりせ ●づつろ ●かんびやう
●トあつ ●くちのやまへ

同 中湯

●せんま ●すばく ●ちやうふろ ●つろふろ
●望ろあん ●うんひやろ ●志やく ●あつけ

同 角湯 御所湯

●づさろ ●まりまつ ●さうどく ●うちこ
●ちのこち ●よいどく ●やけと

新湯 上湯

●志やく ●せんま ●あつ ●あつけ
●望ろあん ●すばく ●でまぬの

同 中湯

●のりせ ●づつろ ●めまへ ●へびくひ
●あつ ●ちあへ ●まりまつ

同 寺湯 裕湯

●せんま ●志やく ●望ろあん ●望ろびやろ
●あつけ ●トあつ ●つろふろ ●望ろとん

塩原山中物産

○鹿 ○猪 ○山雞 ○川鳥 ○山鮎魚 ○鯉魚 ○

河鹿 ○葛粉 ○蕨 ○天狗蕨 ○獨活 ○椎茸 ○

松茸 ○香茸 ○マイ茸 ○一本シメジ ○石斛

○湯晒艾 ○洗土 ○湯花 ○諸財木類

五名石

○木葉石 ○鮫石 ○松乳石 ○芋石 ○貝石

右各々形の相似を以て名附
明治十六年東京博覧會へ出品

下塩原村門前ヨリ各地へ至ル里程

○関谷へ 十二里三町三〇三嶋へ 六里〇白河へ

十七里〇大田原へ 七里〇喜連川へ 十一里

○矢板へ 二七里六〇阿久津川岸へ 十三里

○宇都宮へ 十六里〇日光へ 十六里六町余

新湯ヨリ高原ニ至ル藤原今〇上三依へ 四町余

市ヲ經テ日光ニ至ル十四里〇會津若松へ 六里四町

明治十八年十二月十日御届
同 十九年四月二十四日出版

編輯人 錦 石秋

宮城縣平民

磐城國伊具郡角田
三百六十八番地居住

栃木縣平民

出版人 君嶋玄一

下野國塩谷郡下塩原
拾七番地居住

